

オオルリシジミと「野」の虫たちの保全

須賀 丈

万葉集で山上憶良が「秋の野に咲きたる花を指（および）折り」とよんだ秋の七草。このなかに数えられたキキョウが、長野県のレッドデータブックでは準絶滅危惧種になっています。このことに象徴されるように、長野県でも全国的にみても、近年多くの草原性の植物や昆虫が絶滅のおそれのある状況に追い込まれています。たとえば国や長野県のレッドデータブックで、植物の減少要因の約2割を「自然遷移」または「草地開発」が占めており、またチョウ類ではオオルリシジミなど人里近くの草地や疎林を生息場所とするものが絶滅の危険度が高いとされる種の大半を占めています。

日本列島とその周辺では、気候が寒冷化・乾燥化した氷期に草原性の生物が分布を広げ、現在につづく温暖・湿潤な後氷期には森林性の生物が分布を広げたとされています。そしてオオルリシジミのような草原性の生物は、採草などの人間活動と共存して生きのびてきたと考えられています。しかし20世紀に日本で農村の生活が大きく変わり、このような人里の草地が失われるのにもなって、草原性の生物も姿を消すようになりました。

オオルリシジミは、かつて東北地方と中部地方内陸部、九州の阿蘇・久住地方の各地に生息していました。しかし近年多くの場所で絶滅し、現在では長野県の東御市・安曇野市と阿蘇地方でしかみられなくなっています。そのため長野県と熊本県の指定希少野生動植物とされており、「北御牧のオオルリシジミを守る会」、「安曇野オオルリシジミ保護対策会議」など地元のグループの手で活発に保護活動が行われています。オオルリシジミを復活させるためには、その生息環境である人里の草地の保全・再生が欠かせません。

このような草地は古来どのようにして維持されてきたのでしょうか。江戸時代には全国各地にはげ山、草山、柴山が広がっており、これらの場所から田畑に入れる肥料や牛馬の餌、屋根をふく萱などとしてもちいるために草や柴がさかんに採取されていました。けれども近世は人口・耕地面積ともに大きく増えた時代です。人口がはるかに少なかった縄文時代には、現在よりも気温の高い時期もありました。そのような時代にも、草原は消滅しなかったのでしょうか。

最近のさまざまな研究を総合すると、縄文時代には狩猟や焼畑のための「火入れ」、古代以降は騎馬や役畜の利用のための「放牧」、そして近世には草や柴の「刈り取り」

が、それぞれ草原の維持に重要な役割を果たしていた可能性があります。そのことを知る手がかりのひとつが、黒ボク土とよばれる土壤にあります。この土壤には植物の燃焼で生じた微粒炭が含まれており、過去の草原の立地を示すと考えられています。微粒炭についての最近の研究から、日本列島では縄文時代頃以降、野火が頻繁に起こっていたことがわかってきました。古代以降、信濃国などには多くの「牧」がつくられ、盛んに馬の放牧が行われるようになりました。これらの「牧」は、鎌倉御家人などの軍事力の基盤ともなりました。飯綱高原では、湿原のボーリングコア試料の分析から、平安時代から室町時代の頃に草原が最も拡大したことがわかっています。

20世紀初頭に国土の1割以上を占めていた草地は、近年では1%程度にまで減少しています。これには、採草や牛馬の飼養の衰退、草地の畑地化や急速な植林や開発などが原因としてかかわっていると考えられます。とはいえ、たとえば今でも草原性のマルハナバチが見つかる場所は、黒ボク土の分布とよく一致しています。

長野県に分布する草原性の希少種の由来には2つのタイプがあります。ひとつは中国東北部や国内では九州から中部地方の草原に分布し、氷期に朝鮮半島から分布を広げてきたとされるもの（オオルリシジミなど）、もうひとつは極東ロシア方面や北海道から中部地方の草原に分布し、氷期にサハリン方面から分布を広げてきたとされるもの（アサマシジミなど）です。田の畦や採草地、放牧地などの草地は、このような草原性の生物の避難場所として大切な役割を果たしてきました。身近な自然の豊かさを将来に残していく上では、このような歴史をふりかえってみることも大きな意味があるのではないのでしょうか。

（すか たけし／自然環境部）



オオルリシジミ（東御市で）

こんなこと
やってるよ!

活動紹介

やまもりてんこもり

NPO 山壮辿子盛

「生の自然体験を通して、子どもたちと人間塾」

信濃町で活動している私たちの団体は、「やまもりてんこもり」というちょっと変わった名前です。漢字では「山壮辿子盛」と書きます。「自然を元気にすると、子供達の未来も盛んになる」という意味を込めました。全ての生き物に対し健全な未来を残すことを願って、日々子供達と野山を駆け巡ったり、山の手入れをしたりしています。健全な自然と、健全な子供達の未来は切り離せません。キーワードは人間の意識改革。現代文明の負債を次代に残さないため、啓蒙活動を行っていくのが我々の使命です。現在の活動は・・・

- こどもアドベンチャーキャンプ:小5～高2のメンバーで1年間、毎月いろいろな冒険に挑戦します。過去、PA(プロジェクトアドベンチャー)、軽井沢～信濃町間・静岡富士市～信濃町間の長距離サイクリング、北穂～奥穂高岳・白馬三山・戸隠表山などの縦走登山、オーバーナイト50kmハイク、ビバーク、焚き火自炊、鶏を捌いて料理、クラフト、救急法、スノーシュー、雪中キャンプ、スキーツアーなど、大人でもちょっと尻込みするようなものを行いました。1年間同じ仲間と一緒に冒険体験を通じて、人間にとって大事な心と感覚を養います。
- ①アウトドアで遊ぼう②サバイバルに挑戦しよう:どちらも毎月1回、野外でいろいろな遊びを行うプログラムです。①は保育園年長～小6、②は小3～中2が対象です。野外料理や焚き火、ターザン、木登り、川遊び、基地作り、登山、スノーシュー、キャンプ、雪山探検などの活動を行います。外でみんなと遊ぶことにより、コミュニケーション能力、自然に親しむこと、身体の上手な使い方、危険への嗅覚を磨くことを目的にしています。

- その他に、長期休暇中のやまもりキャンプ、野外活動リーダー養成などを行います。
- 森林整備:メンバーに林業のプロがおり、里山の手入れを中心に森林整備をします。5月にNPO法人登記予定です。

(「山壮辿子盛」理事長 平木 順)



北アルプス縦走中(奥穂高岳にて)

会への問い合わせ先

特定非営利活動法人 山壮辿子盛(やまもりてんこもり)自然の中の人間塾
〒389-1316 長野県上水内郡信濃町大井2742-467

Tel & Fax 026-255-5649

メール yamamoritenkomori@gmail.com

話題の映画紹介

「アース earth」

製作年:2007年、上映時間:96分

先日、5歳の娘を連れて観に行ってきました。「ドラえもん」でさえ途中で映画館を退場してしまう娘が最初から最後まで集中して(途中、象がライオンに襲われるシーンでは泣いていましたが…)観ていました。それほどの美しい映像と自然の雄大さ、生きものたちの生死をかけた姿を十二分に堪能することができる映画だと思います。

この映画は、そのタイトルのとおり地球が舞台のドキュメンタリー作品です。地球に地軸の傾き(23.5度)があるからこそ生まれる四季のうつろいや、極地、温帯、サバンナ、熱帯など寒暖や乾湿の異なる自然環境とそこでの生物の営みを、北極から南極へと旅をしながらカメラが追っていきます。地球における自然の営みのすべてを、わずか90分程度の限られた時間で紹介するのは難しいこととは思いますが、逆に短時間だからこそ地球が育んできた自然の多

様さが強烈な印象として残るように思いました。

冒頭とラストのシーンにはホッキョクグマが登場します。地球温暖化の影響により北極海の氷がうすくなりつつあり、餌をもとめてひたすら移動するホッキョクグマ。そしてとうとう…。この映画の中には、こうした地球温暖化へのメッセージもわずかながら含まれています。しかし、それよりはむしろ、なぜわたしたちは自然環境を守るべきなのか、という人類の生存にとっての原点を伝えようとしていると感じました。

帰りがけ、娘にどこが一番おもしろかった?と聞きました。すると「あの鳥が踊るやつ」と答えました。5歳の娘には、何にもましてゴクラクチョウの華麗な?求愛ダンスが印象に残ったようでした。

(浜田 崇)

『変わりゆく信州の自然』の本が出来ました!

最近、身近な自然に何か異変を感じませんか?その一方で、レッドデータブックって何?とか、外来種をどうする?あるいはクマやシカが農作物を荒らすのはどうして?エコツーリズムって何?里山はどうなっている?温暖化の身近な影響は?などなど、気になるけれども、答えがはっきりしないことがたくさんあるように思います。さらには、これらの問題は相互につながりがあるのでしょうか…。そんな疑問にお応えする本が出来ました。

この本は、環境保全研究所のスタッフ13名が執筆者となり、“身近な自然の変化”を軸に現代の自然保護に関わる事柄を幅広く解説したものです。2006年1月から約1年間にわたって新聞に連載された「変わりゆく長野の自然」という記事をもとに、さらに1年をかけて新たな書き下ろし原稿と編集を加えて一冊にまとめられました。内容は「希少な動植物とレッドデータブック」、「外来種の何が問題か」、「人と自然との関わり」、「多様な環境変化」という4章で構成されています。様々な生き物たちの現状から、人の暮らしと里山の変化、そして地球温暖化などの環境問題までが収められています。一冊を通して、身近な自然の変化と、地球規模の環境問題がひとつづきになっていることを実感していただけることと思います。

環境保全研究所には、たくさんの専門分野のスタッフが集まっています。また日々の研究成果は、報告書や研究論文などとして公表されています。しかし、それらは専門的な記述が多く、必ずしも誰もが気軽に読める資料とはなっていません。本書では、最新の研究成果や科学的な裏付けをふまえながら、小中学生から年配の方々や普段自然に接する機会の少ないの方々まで、たくさんの人が気軽に読みすすめるように、用語や表現などを整えました。また、各話題を2ページに簡潔にまとめてあるので、興味のあるところから拾い読みすることもできます。もちろん、幅広い話題をとりあげながら、何度も打ち合わせを重ねて常に一貫した視点をもって編集をすすめました。科学が細かな専門に分かれてしまっているなかでは、あるひとつのテーマを深く知りたいという人にとって、本書は物足りなく感じられるかもしれません。けれども、現代の複雑にからみ合う自然保護問題の全体像を知り

たいという人には、きっと参考にしていただけるものと思います。

“変わりゆくもの”を見つめることは、なくしてはいけな、かけがえのない自然が身近にあることを知るきっかけになります。各地にのこる貴重なふるさとの自然が、地域の暮らしとともに将来にわたって大切に守られ、育てられてゆくことを願っています。

(富樫 均/とがしひとし/『変わりゆく信州の自然』

編集委員長/自然環境部)

【目次】

第1章 希少な動植物とレッドデータブック

オコジョ/ヤマネ/オオタカ/ハチクマ/サシバ/アカモズ/モリアオガエル/メダカ/イワナ/シナイモツゴ/ホトケドジョウ/ウケクチュウグイ/カワシンジュガイ/ギフチョウ/ヒメギフチョウ/オオルリジミ/オオムラサキ/ホンシュウハイイロマルハナバチ/カタクリ/ナニワズ/ヒメザゼンソウ/オキナグサ/トガクシソウ/ミズオオバコ/コマウスユキソウ/ヤシャイノデ/ホシツリモ

第2章 外来種の何が問題か

アライグマ/アメリカミンク/ソウシチョウ/ブラックバス/セイヨウオオマルハナバチ/アメリカザリガニ/セイヨウタンポポ/アレチウリ/ニセアカシア/オオカワヂシャ

第3章 人と自然との関わり

鳥獣被害ツキノワグマ(上・中・下)/鳥獣被害サル/鳥獣被害イノシシ/鳥獣被害ニホンジカ/農地の減少/里山ビオトープの試み/子どもの遊び/川とのつきあい/資源の循環利用/登山道と植生荒廃/山のし尿処理/地すべりとの付き合い/エコツーリズムへの期待

第4章 多様な環境変化

平均気温の上昇/温暖化と植物/第2・3次産業へ比重/バイオマス資源/地域の食文化/失われる草原/里山の森林/消えゆく風土の特色/信州の里山(上・中・下)/自然体験



県内各地の書店で取り扱っています。

(『変わりゆく信州の自然』編集委員会編著、編集協力
長野市民新聞社、2008年2月ほおずき書籍発行、四六判140ページ、定価1,500円+税)



平成20年度 『自然ふれあい講座』の ご案内

身近な自然に触れ、環境保全に関心をもつていただくために、研究所が開催する一般向けの講座です。内容は研究員の専門や最近の話題をもとに、自由な発想で企画しています。どうぞご参加ください。

1 生き物が多様に生きる自然

1. 谷地～人の暮らしに寄りそう生きものたち(飯綱町)
5月11日(日) 担当:堀田・富樫
2. 高地の水辺～上高地の動植物観察会(上高地)
6月28日(土) 担当:北野・大塚
3. 草原～美ヶ原の花と昆虫(美ヶ原高原)
7月13日(日) 担当:須賀・尾関

2 信州の自然・これから

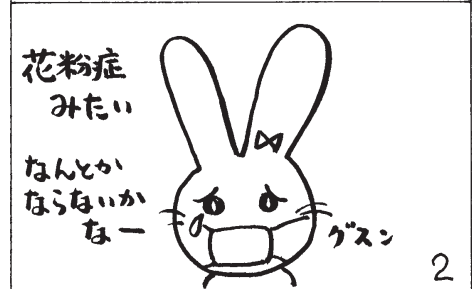
1. 迫りくる外来生物～植物編(千曲市)
6月8日(日) 担当:前河・永井
2. 自然史王国信州を歩く～溪谷編(阿寺溪谷)
8月31日(日) 担当:富樫・尾関
3. 人がつくった草原～スキー場の植物たち
(飯綱リゾートスキー場)
9月7日(日) 担当:永井・須賀
4. 迫りくるシカ～拡大する生息地(霧ヶ峰高原)
10月4日(土) 担当:岸元・北野

3 地球温暖化を実感する

1. 実感!CO₂のおもさ～あなたが減らせるCO₂(夏編)(長野市)
8月9日(土) 担当:浜田・畑中・陸
2. 植物の変化から知る地球温暖化(松本市)
11月8日(土) 担当:大塚・堀田
3. 実感!CO₂のおもさ～あなたが減らせるCO₂(冬編)(飯田市)
1月24日(土) 担当:浜田・畑中・陸

※自然ふれあい講座は1ヶ月前から参加申し込みを受け付けます。詳細については環境保全研究所 飯綱庁舎までお問い合わせください。

よもまくんへの 悩み相談 作・もよもよ



編集後記

足音たてて春がやってきました。飯綱高原の雪も徐々に消えつつあります。巻頭言には、クマの生態調査をされてきた経験から、農村の未来を危惧する重く鋭いメッセージをいただくことができました。今年に入り、地球温暖化に関する関心も一段と高まっています。さまざまな情報があふれる中、「身近な自然に一体何が起きているのか」を、ひとりひとりが感じとることが、今とても大切なように思います。(編集担当 富樫 均)



この印刷物は、大豆油インクおよび古紙配合率70%再生紙を使用しています。